

2014年パナマ大統領選挙概要

—選挙結果分析及び次期政権の課題—

松嶋 慧

2014年5月4日、大統領選挙・国会議員選挙・市長選挙・地区長選挙を含む総選挙が行われた。当国総選挙は5年毎に行われ、前回の2009年大統領選挙においては民主変革党 (Cambio Democrático: 以下 CD 党) 及びパナメニスタ党 (Partido Panameñista) が野党連合を組み、リカルド・マルティネリ候補 (CD 党党首) が60%以上の高得票率をもって当選した。これにともない副大統領兼外務大臣としてパナメニスタ党フアン・カルロス・バレラ党首が就任したが、その後11年にマルティネリ大統領が同氏の外務大臣職を解任したことを契機に連立が崩壊し、両党間に対立を生むこととなった。

今次選挙においては、主要政党からはCD党アリアス候補、パナメニスタ党バレラ候補、民主革命党 (Partido Revolucionario Democrático: 以下 PRD 党) ナバーロ候補が出馬し、当日は右三候補による混戦が予想されたが、選挙後開票開始から約3時間後、バレラ候補の勝利が伝えられた。

本稿では、今次大統領選挙の結果分析及び次期政権が直面する政治的課題についての考察を行う。

選挙前世論調査結果

各世論調査会社による大統領候補支持率調査の結果では、他の候補にある程度の差をつけて常にCD党アリアス候補が優位に立っており、次いでPRD党ナバーロ候補、パナメニスタ党バレラ候補が続くというデー

タが大半を占めていた。とは言え、いずれの調査結果においても各主要候補の支持率差は数ポイント程度となっており、長年選挙分析を行ってきた当国政治専門家からも結果が読めないと口を揃える予想の難しい選挙となった。

選挙結果

選挙前の下馬評通りにCD党マルティネリ候補の圧勝となった2009年大統領選挙時とは異なり、接戦の予想された今次選挙の開票には多くの時間を要するものと見込まれたが、5月4日16時の投票終了から約3時間後、選挙裁判所よりパナメニスタ党バレラ候補の当選確定が発表された。同機関が6月5日に発表した最終選挙結果 (開票率100%) によれば各候補の得票率はバレラ候補39.1%、アリアス候補31.4%、ナバーロ候補28.1%と、バレラ候補が次点アリアス候補に7%以上の差を開けての当選となった。最終投票率は09年選挙時よりも3%近く上昇した76.8%を記録した (最終投票者数1,886,308人)。

バレラ候補の勝因

各世論調査において不利と見られていたバレラ候補が相当の差をつけて当選したことは予想外であったが、同時に納得のいく結果でもあった。バレラ候補は同世論調査における『絶対に投票しないであろう候補』というアンケート項目において5%という数字を



フアン・カルロス・バレラ次期大統領



5月4日投票所の様子

選挙裁判所 Facebook ページ (https://www.facebook.com/tepanama/photos_stream#!/tepanama/photos_stream) より

獲得していたが、これは同項目においてアリアス候補及びナバーロ候補がともに25%程度を記録していた事実を考慮すれば圧倒的に低いものであり、バレーラ候補が有権者全体から好意的な評価を受けていた事が窺える。またかねてから政治家として活動してきた同候補はその人柄の良さが一般に広く認知されており、好き嫌いの分かれる他の二人の候補には無い国民全体への印象の良さが武器の一つとなった。

一方、アリアス候補率いるCD党はマルティネリ現大統領の人気を利用し好調なキャンペーンを行っていたように思われたが、アリアス候補は政治的なキャリアに浅く、大統領候補公開討論等でも稚拙が見られるなど、政治家としての手腕の乏しさを国民に見せてしまう言動が目立った。またCD党は副大統領候補としてマルティネリ大統領夫人であるマルタ・リナーレス女史を据えたことで、同党が勝利すれば次期政権はマルティネリ大統領の傀儡となるのではないかという懸念が一般に広まり、PRD党とパナメニスタ党が政権を交代してきた歴史を持つパナマに根付く政権の固定化を嫌う風潮の中、次第にCD党に対する拒絶が生まれていたと考えられる。また強権政治と表現されるマルティネリ政権の下、公務員をはじめとする層には真意を隠してCD党への支持を表明していた者も多くいたと考えられ、“虚偽票”とも言えるこうした有権者の偽の意思表示が、選挙前支持率調査と実際の選挙結果との間に大きなギャップを生んだ要因の一つであると推測される。

PRD党ナバーロ候補は1999年から2009年まで二期連続でパナマ市長を務め、国民からの認知度の高さと共に政治家としての経験も豊富な人物であるが、4月25日に発表されたIPSOS社による選挙前最終世論調査においてアリアス候補を抜き支持率トップの座を獲得していたにも関わらず、実際の選挙では3位という結果に終わった。ナバーロ候補への票が伸び悩んだ要因として、パナマ市長時代の実績の少なさやマルティネリ大統領との癒着疑惑といった政治家としてのイメージダウンにつながる要素に対し、これを払拭できなかったことが挙げられる。またTVインタビュー等においてカメラが向いている時だけ表情を変えるなど、さながら俳優が演技をしているようで誠実さに欠けるとの声も多々上がっており、こうした態度もまた同候補に対する不信感の増大に拍車をかけたと思われる。

PRD党という国内最大の党員数を誇る政党を抱えるナバーロ候補は、本来であれば同党による組織票を期

待できた筈であった。その強大なポテンシャルを最大限に活用することが出来なかった一番の原因として、09年選挙時にPRD党エレーラ候補に対し当時のチャベス・ベネズエラ大統領から不正に資金援助を受けたという疑惑が持ち上がった際、ナバーロ候補がこれを肯定するような発言を行い党内の輿論を買ったことが挙げられる。この一件は同候補と当時の執行部を中心とする党員との間に深い確執を残し、一枚岩となって臨まれるべきであった今次選挙においても党内支援の希薄さとなって現れることとなった。

また独立系団体ヌエバ・レプブリカによる支援も、結果的にナバーロ候補にとっては逆効果であった。同団体はこれまでPRD党に対する痛烈な批判を行う団体として知られてきたが、選挙直前になってCD党アリアス候補の当選阻止を目的に、ナバーロ候補に対する投票を呼びかけた。この政治的理念に欠けるとも言える行動は国民の大きな反発を呼び、ひいてはナバーロ候補への支持を取りやめバレーラ候補へと鞍替えする有権者が現れるという結果を生み出したと考えられる。

以上の様に、今次選挙では必ずしも当初からバレーラ候補に対し本命候補としての白羽の矢が立っていたとは言えないものの、支持層に偏りがあり、また上述のような問題もあったアリアス候補及びナバーロ候補への不信感は、結果として、飛び抜けたアピールポイントこそ持たないものの国民全体から好感を持たれているバレーラ候補に対し他の二候補の票を流すという効果を生じさせたと言えるだろう。

バレーラ次期政権の課題

汚職や不正な資金流用の噂が絶えず、ビジネス



バレーラ次期大統領（中央右）の認定式の様子
パナマ政府公式ホームページ (<http://www.presidencia.gob.pa/Vice-Presidente>) より

(提供:徳倉建設)

(negocio) と形容されることの多いマルティネリ大統領の政治に対して、バレーラ次期大統領はこれを奉仕 (servicio) に変え、透明性のあるクリーンな政治をめざすことを約束した。しかしながら、その前途には未だ解決の見えない多くの問題が立ちまわっている。

マルティネリ政権下においては昨今の湾岸道路 (Cinta Costera) の建設やメトロの開通など、国民の生活を豊かにする様々な大規模公共事業が行われた。バレーラ次期大統領はこうした事業に関してその業績を認めるとともに次期政権においても継続を約束しているが、マルティネリ大統領の就任時に 108 億ドルであった公的債務残高は現在 174 億ドルにまで膨れ上がっており、その財政には大いに悩まされることが予想される。またマルティネリ大統領はアリアス候補の落選以降、メトロ運賃を経済性を無視した安い値段 (35 セント) に設定したり、急遽特別国会を招集し同性婚を認める法案を提出するなど (バレーラ次期大統領は敬虔なカトリックとして知られる)、次期大統領が就任後に苦慮するであろう問題を随所に生み出している。

また国会におけるパナメニスタ党議席の少なさも、バレーラ次期大統領の悩みの種となっている。同党は 6 月 4 日の国会議員信任状授与式の時点で確定している 51 議席のうち、僅かに 11 議席を獲得しているのみであり、連立を組んでいる民衆党の 1 議席と合わせても計 12 議席と、過半数の獲得にはおよそ満たない議員数となっている。この状況を打破するべく野党との連立が望まれるところであるが、2011 年に崩壊した CD 党との連立が回復するとは考えにくく、歴史的に対立を繰り返してきた PRD 党との連立もまた現実味が乏し

い。現在パナメニスタ党と PRD 党との間で議員レベルでの閣外協力体制の確立に関して話し合いが行われているが、PRD 党からは同党より 2 年間国会議長を選出する事を要求されているなど、一筋縄にはいかない交渉となっているようである。

他方、次期大統領の掲げる公約についても、その実現性が疑問視されている。バレーラ次期大統領は選挙キャンペーンで国民の最大の懸念事項となっている物価高への対策として基礎食料品 22 品目の価格凍結を公約したが、そのメカニズムに関しては明確な説明がなされておらず、対象品目の供給不足や品質低下をはじめ、中小規模の生産者に対し大きな打撃となる可能性があるとして、これを不安とする声が高まっている。また物価高と並んで国民の関心の高い治安問題に関しては、近年の犯罪増加を受け、マルティネリ政権下より治安省の創設や警察官の待遇改善・刑務所の建設等様々な対策が行われてきたものの、依然状況は改善されておらず、次期政権においてはより効果的な対策が求められる。

また外交面では、今年 3 月にベネズエラとの間で外交関係が断絶しており、5 月に領事関係のみ再開されたものの未だ完全な関係回復には至っておらず、新政権発足後の同国との交渉が課題となっている。

(なお、本稿は個人の見解に基づくものであり、外務省ならびに在パナマ日本国大使館の公式な見解を示すものではない。)

(まつしま けい 在パナマ日本国大使館専門調査員)

ラテンアメリカ参考図書案内



『エル・ミラドルへ、そのさらに彼方へ -メソアメリカ遺跡紀行』

土方 美雄 社会評論社 2014 年 2 月 336 頁 2,600 円+税

1991 年からメソアメリカの遺跡巡りを続け、これまで 4 冊の紀行記を出したライターの、いわば総括的紀行記。

ユカタン半島のウシュマル、チチェンイツァやメキシコ国立人類学博物館、チヨルーラ遺跡。グアテマラのエル・ミラドルへの困難な旅、ティカルはじめ低地のマヤ遺跡群、メキシコ南部オアハカのモンテ・アルバン等の訪問、南のチアパスのマヤとオルメカ、メキシコ南部とグアテマラ太平洋岸からホンジュラスへの縦断旅行など、2008 年から 12 年にかけて多くの遺跡を訪れた記録。 (桜井 敏浩)